
中世ルーズレイト劇場

rot

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

中世ルーズレイト劇場

【コード】

N9090W

【作者名】

rot

【あらすじ】

本当は、優しいのだが少し無愛想な少年レオンと、謎の木登り少女A？は誰も来ない筈の秘密の木の下で出会ってしまった。

一向に噛み合わない二人だったが、小さなキツカケで意気投合することになった……。

そして愛らしい二人が織り成す、物語の幕が開けた。

そして、少女の真の目的とは……？

第一章【この深い森の奥に】（前書き）

三人称でした：

これから、頑張っていきます。

最高の起承転結にしたいです！！

第一章【この深い森の奥に】

ここルーズレイトはフランス郊外にある街。市街は賑わいに溢れ、この時代にしては珍しいことに、農民と貴族の関係は比較的親密な街である。

第一章【この深い森の奥に】

1754年4月14日6時30分

ここは、周辺の住人もめつたに踏み入れない、神聖ささえ感じさせる老木の生い茂った深い森の中。その樹木の間を縫い、コラベール
「レオンは人の通ることなどまるで想定されていない道を行く。」

地面から表出した木の根、落ち葉や枯れ枝を踏みしめているレオンの額には、気温の下がった朝方にも関わらず、ぽつぽつと玉の汗が浮いている。

そのまましばらく歩くと、ついに森が途切れ、高原のような開けた空間にたどり着いた。清々しい心地の良い風がレオンの頬をかすめ、思わずほっと一息。辺りには背の低い芝が地面いっぱい茂り、そこかしこから涼やかな虫の音が響く。

レオンは耳を澄ませてしばし虫達の静かな歌声に聞き入り、その疲れを癒した。

生い茂った植物達は風に吹かれ、まるで誰かに語りかけるかのように、そよそよと体を揺らしていた。

その光景を見たレオンは、さも気持ちが良いという表情を大きく背伸びをした。

山の中腹に存在するこの高原は、レオン以外誰も知らない秘密の場所である。

そもそもこんな朝っぱらから、レオンがこの場所にいる理由は勉強をサボったのだ。年齢は15才と幼いため立派な貴族になるための英才教育がレオンにとって苦でしかないのだろう。

今日の教育が終わるまで、ここで睡眠を取るつもりなのである。

慣れた足取りでここまで来たレオンは、一あくびすると高原の中心に歩を進めた。

この高原の中心には、他に類を見ない巨木が一本、その存在を誇示して佇んでいる。天に届けとばかりに伸びたその枝の真下、青々とした葉群によつて生じた、涼やかな風の吹く日陰が、レオンのお気に入りの場所である。

まだ体力のあり余っているレオンは、浮足立ちながら足早にそこへ向かった。

ここまでは、レオンにとってはいつものことである。が、その樹の中心から十歩ほど離れた地点まで近づいた時、今日は何か、いつもにはない違和感を覚えた。

「うん？なんだアレ」

レオンの位置からは良く見えないのだが、木の裏側になにかが落ちてあるのだ。

人が来ないはずのこの場所に落とし物が落ちるなんてありえない事だ。不思議に思ったレオンは、恐ろしい気持ちもあって悩んだが、大きな木の裏を覗いた。

すると、いつもは冷静なレオンのだが珍しく驚いた表情をした。

「ひっ人!!!」

不意に出てきた言葉の通りなんと木の裏にあったのは、物ではなく一人の少女だった。

片手を大空に上げ背伸びをしたポーズという少しおかしな体勢をとっていたその少女は声に気がつき、レオンの方向に顔を向けた。

すると、レオンは一目で、彼女がルーズレイトの人間ではないと直感で分かった。

何故なら彼女はこの世の者とは思えない程、可愛らしかったのだ。

まだ、16歳前後なのだが、肌は透き通るように白く、目の色は寶石の様な澄んだな青色で、吸い込まれてしまうのではないかと思う程大きな瞳をしている。

髪色は鮮やかな金色で風に揺られるのを見るだけで気持ちが良くなるほどだ。

その姿を見たレオンは、心の中で有らぬ思考になっていた。

『なんだこの可愛らしい物体は、人形か？』

服装は目立たない控えめな白のドレスを着ているだけなのだが、その控えめなドレスも彼女が身に着けているだけでまるで、全身シルクの生地で作られたドレスのように高級な品物じゃないかと勘違いしてしまう程なのだ。

こんなキレイな美少女が街にいたら、ここではかなり浮いてしまうだろう。

一瞬動きの止まってしまったレオンにたいして、少女はこう問いかけた。

「アナタ…誰？」

混じりけの無い瞳でそう問いかけた少女、しかし、レオンの口からとんでもない返事が返ってきた。

「うわっ！喋った！！」

流石のレオンでも、少女が振り返った時点で、人形という選択肢は捨てておくべきであろう。

しかし、レオンは、その言葉を聴き我に帰ったのか、また違った返事に変えた。

「そこ、どいてくれ、休ませてくれ」

恐らく多少の照れ隠しも混じっているのだろう、少しぶっきら棒に振る舞いそう言い放った。

しかし、この山はコラベル家が管理している山なのであながち間違ったことを言っている訳でもないのである。

すると、少女は控えめな様子でこういった。

「あっうんすぐ、どくね」

そういうと、慌てて少女は3歩程木から離れ、この大きな木をぼんやりと見つめていた。

直ぐにレオンは少女のいた木の真下に移動すると、そこに仰向けで寝転がり一息ついた。

その瞬間レオンにとっての体感時間がとてもゆったりとした時間になり、やすらいだ気分になった。

眼をゆつくりとつぶったレオンは改めてなんでここに人が来たのかと思った。

確かにおかしい話である。ここは、誰も入らないような山の奥深く、レオンの様に近道でも知らない限り相当時間が掛かってしまうのだ。レオンもこの場所を昔は知らなかった。

しかし、大好きだったレオンの父が死の数日前にこの場所を教えてくださいましたのだ。

もし、お前が困った時この場所にいきなさいと

レオンはその言葉の通りこの場所に今も良く顔を出している。

体の調子が悪い時や困った時この場所に行くとは何故だか自然と体が楽になり、とても心地のいい気分になった。

今日も面倒な教育を抜けてゆっくりとした気分になりたいために此処に来たのである。

父はレオンに人が来ない場所と言って此処を教えた。

それにも、関わらずこの場所に人がいる。

レオンは少し考えた後、小さな声で呟いた。

「もしかしたら、あの子は幽霊なのかもしれない」

人形の後には、幽霊である、変な事を考えてしまいどうしても気になったレオンは目を少し開けて様子を伺った。

すると、目の前にはもじもじした少女がまだいるのである。

「そんな訳ないか」

そう小さく呟くと、少し安心したが、ずっと目の前で突っ立っていられるのも、少し変な気持ちである。

「……………」

時間がゆっくりと過ぎていく中、レオンは少女がまだ目の前に立っていると思うと気が気でゆっくり休めなかった。

すると、レオンは目を開けると同時に少女に向かってこう言った。

「俺の目の前でそんなにもじもじされても困る…ん…だが」

しかし、レオンの想像に反して目の前に少女は居なくなっていた。

まさか、本当に幽霊！！

そんな馬鹿な想像が頭をよぎったレオンは、辺りを見渡した。

すると少女はいた。

しかも、レオンの真上にある大きな木に抱きついてよじ登ろうとしているのである。

「なっなにしてんだっ！！」

レオンはそんな事をつい叫んでしまった。

すると、少女はこう言い放った。

「この木に登りたいの」

レオンはその言葉に強く反応しこう考えた。

『乗って欲しいのか、最近の民衆のボケは此処まで発展しているのか!!!』

馬鹿な考えに至ったレオンはその瞬間こう言った。

「最近の奴って木登り好きなんだな〜てっ、んな訳あるかい!!」

レオンの貴族なりの誠意一杯の乗り突っ込みだった。

しかし、レオンは驚愕した、なんとあれだけ捨て身の突っ込みをしましたがにも関わらず、少女は未だに木登りに夢中なのである。

「勝手にしろ」

ため息混じりでこんな事を呟いてレオンは馬鹿らしい事をしてしまったという様に、また再び木の真下に行きゆっくり目を閉じた。

第一章【この深い森の奥に】（後書き）

前書きにもある通り初めての連載小説です。

まだまだ至らぬ点がございませうので、感想からアドバイスまで幅広く聞きたいです。

これから、頑張って行きたいので清き一票よろしくおねがいします
（アレッ選挙？）

第二章【夢の中の少女】（前書き）

三人称なのかますます不安です

第二章【夢の中の少女】

数分後、気がつくのとレオンの目の前にあの先ほどの少女が立っていた。

しかし、今立っている少女は先ほどより明らかに幼くなっている。

あの後、直ぐ寝てしまったレオンは夢の中にいるようだ。

勿論先ほど見た少女は出会って間もなく、名前も分からないような人物である。

そんな事を考えていると、少女は悲しそうな顔になり突然泣き始めたのである。

その涙を見ているとレオンも、凄く悲しい気分になった。

何と言っているのか分からないのだが、少女はこちらに向かって泣きながら喋りかけてくるのである。

レオンはたまにきずく事がある、目の前に始めて会った少女が何故か泣いている、無機質な背景、視覚以外の五感が存在しない状況、そしてこんな場所に平然という自分こんな変な状況をたまに、夢ときずくことがあるのだ。

「これは、夢か」

そう呟くと、突然レオンの体は軽くなり宙に浮いた様な感覚になると視界全体に光が差し込んだ。

そう夢から覚めたのである。

何故か、レオンは時々夢の中で、これが夢と分かった時、自然と目

を覚ますことがあるのだ。

レオンが眠りについてから恐らく3時間程経ったであろう。

「なんで、あのもしもじが夢に出てきたんだ。」

レオンは先ほど夢に少女が出てきたのが気になったらしい。ついでにレオンにとって、少女の名前は完全にもじもじになってしまったようだ。

木に持たれかかった状態のレオンは、座った大勢で大きく背伸びをすると、辺りを見渡した。

あの少女の姿はもう無かった。3時間もたったのだもう何処かへ行ってしまったのだろうか。

レオンはそんな事をぼんやり考えていると、木の葉が擦れるような音がした。

それと、同時に木の上からレオン目掛け大きな何かが振ってきた。

レオンはその瞬間、体の体制を一気に変え全力でその攻撃をかわした。

「誰だ!!!」

レオンは神経を研ぎ澄ませ、その大きな物体に注目した。すると、またもレオンは驚いた。

「な…んで」

そう頭上から落ちて来たのは、あの少女だったのだ。

という事は、この少女は3時間以上木登りしていたことになる。そして、レオンの中で何かが繋がった。

『恐らくこの少女は、心から木登りを愛しているのだと…。』

一見そんな間違った事に興味を持つような人には見えないのだが、事実3時間も木登りをしているのである。

しかも、先ほどまでキレイだったドレスも土や木くずなどで真っ黒に汚れているではないか。

レオンは飽きたような表情をした。

「お前は馬鹿か」

すると、少女は顔から火が出てしまっんじゃないかと思うほど頬を真っ赤に染め

「イタタタ後少しで登れるのに」と小さく呟いた。

少女は悔しそうにポロポロになった服を軽くはたくとまた直ぐに、その木に登りだした。

レオンはしばらくその少女の様子を見ていたが、このままでは埒があかないと思ったのだらう突然少女のもとに駆け寄り手をさし伸ばした。

「手伝ってやるうか」

すると、少女の表情はとても明るくなり、満面の笑みで大きく頷いた。

無愛想なレオンとは大違いの反応である。

しかし、その明るい表情は直ぐに曇った表情に変わり『どうやって

？』と少女は尋ねた。

その言葉を聞いたレオンは少し考えた後、何か思いついたのか突然両手を突き出し重ねて、中腰で構えた。

どうやら、その手の上に乗ってもらいジャンプの手助けをするというところらしい。

流石の少女もこれには顔を引きつらせて、拒否するような仕草をした。

「おいつさつさと登るぞ」

しかし、いざとなった時に限って全く空気の読めないレオンの顔は本気である。

その様子を見ていた少女は途中から無理とは言い出せなくなり観念したのか仕方がなく飛ぶことを決心した。

息を深く吐き出した少女は、軽く助走をつけレオンの手に体重を少し乗せたかと思うと、そこから一気に蹴りだした。

すると、その瞬間レオンの腕に少女の全体重が掛かり、浮きも沈みもしない並行状態のまま、木に向かってキレイに横にスクロールされた。

「アウツ！！」

鈍い音と共に少女は奇声をあげた。

案の定木に度派手にぶつかってしまった少女は痛みで顔を歪め、そのままうずくまってしまった。

「だっ大丈夫か！」

急いでそうレオンが尋ねると、少女は微かに頷いた。

どうやら、本気で痛かったようだ。

レオンがしばらく心配そうに様子を見てみると少しずつ元気になったのか俯いた状態で返事を返した。

「だっ大丈夫」

返事を返して直ぐ、少女はフラフラ立ち上がると、また木のぼりを始めようとした。

流石のレオンもこれは止めにはいろうとした。

しかし、少女はレオンの忠告するより先に地面に崩れ落ちた。

先ほどぶつかった衝撃ではなく、一度腰を降ろしたことによって疲れが体にきてしまったようだ。

レオンは、少女を木陰に誘導し、無茶をしないよう注意した。

すると、少女はレオンが注意しているにも関わらず、レオンの顔を見て我慢出来なかった様子で突然笑いだした。

「ククツククク」

「おいっなんで笑うんだよ」

レオンは少し怒った口調でそう聞いた。

「だって、顔に泥がついてるからなんだか可笑しくて」

恐らく先ほどのジャンプでレオンの顔に地面の泥がついたのだろう。

そんな事を言いながら笑っている少女の顔や体はレオンより真っ黒である。

その少女の姿を見てレオンもつい小さな笑みがこぼれた。やがてそ

の笑みは自然と大きな笑いに代わっていった。

レオンと少女の声は高原に響きしばらくの間、森は賑やいた。

第二章【夢の中の少女】（後書き）

よんでくださりありがとうございます。

感想は勿論、アドバイス、ご指摘などもお待ちしております。
よろしく願います。

第三章【異常】（前書き）

昔のフランスのお話です。

フランスの事をもっと詳しくなりたいという方にはあまり意味がなさそうです！

第三章【異常】

あれから、少しだけ時間がたった。

レオンはふとあることに気がつき尋ねた。

「もじもじは何処でこの場所があることを知ったんだ。それにどうしてそんなに木登りが好きなんだ？」

そう問いかけてみたが少女から返事はなく、レオンは横に座っている少女の顔を覗き込む様にして伺った。

すると、予想もしない事態が少女の身に起こっていた。

原因は分からないのだが少女の顔は真っ青になっており、呼吸が荒くなっている。

「おっおい大丈夫か」

レオンが少女に向かって問いかけるが返事がなく、それどころではない様子だ。

訳が分からないままレオンはしばらく少女に向かって声をかけたが、レオンの声も虚しく少女は気を失ってしまった。

「だっだれか、助けてくれ、人が倒れた！」

レオンは大きな声でそう叫んだが、ここは、山奥なので近くに家はなく聞こえる筈がなかった。

やむ終えず下山をすることにしたレオンは少女を担ぎ山を下り始め

た。
思ったより勾配がきつく下るだけでもかなり時間がかかりそうである。

「うあっ！」

いつもは容易に下山できるレオンのだが、少女とは言えレオンと身長がそう変わりのない一人担いで山を降りるのは流石に厳しいようだ。

背の丈程の大きさのある草を掻き分けボロボロになりながら1時間程でどうにか

下山したレオンは、病院より近くにあるコラベル家の屋敷に向かった。

玄関に辿りついたレオンはドアを開けると、すぐにこう言った。

「誰がいるか」

そう言くと、廊下の奥から茶色い髪の子がやってきた。

「坊ちゃんそんなに慌ててどうかなされたんですか。」

「リリーさん、丁度良いコイツを見てくれ」

レオンはそう言うと後ろに担いでいる少女をリリーに見せた。

「ぼっ坊ちゃんその可愛らしい子、どうしてこんなこと……まっまさか誘拐してきたんですか……！」

とんでもない解釈に至った使用人である。

「いや、どう見ても違うだろ病人だよ病人」

そう事情を説明すると、リリーは顔色を変え

「坊ちゃん手伝って下さい」

と言い、レオンと共に少女をベットまで運んだ。

リリーは直ぐに気道の確保や、睡眠薬等・毒物の入れ物を持っていないか、傷口や耳からの出血、口の中の状態などを一通り調べ少女の体を横に向けその後、症状を軽くする薬を飲ませた。

幸い、リリーは昔病院に勤めていたため、この手の治療には慣れているのだ。

「原因は分かりませんが命は助かりそうです、呼吸も脈もあります。それにしてもこの子一体どうしたんですか、思ったより症状が酷いので植物状態や後遺症が出る可能性だって十分にありますよ」

そんな言葉を突きつけられたレオンは、黙り込んでしまった。

第三章【異常】（後書き）

ご意見ご感想お待ちしております。
何かと間違いの多い人間ですので、アドバイスなどもあれば嬉しい
です。

第四章「メモリー」(前書き)

さあー第4章到達です。

まだまだ、続きますよー

いつか、2人で旅をさせる予定です

第四章【メモリー】

19時22分、少女がこのコラベル家に着いて、7時間以上たった。未だに少女は目を覚まさない。

『ぐづううううう』

少女の様子を伺っていたレオンの腹部から重低音の叫び声が聞こえた。

朝から何も食べず、少女を担いで山を降り、更に夜ご飯に差し掛かるうとしているのである、お腹が空腹を訴えるのも無理がないだろう。

「坊ちゃん、この子の様子は私が見ておきますので、ご飯を食べられてはいかがですか…」

リリーはレオンにそう勧めたが、レオンは断固として動こうとしなかった。

レオンはしばらくぼんやりしていると、リリーが調べた少女のポケットの中身がまだ出たままだったのに気がついた。

とはいっても、ポケットの中にはヒビの入ったネックレスが一つだけだったのだが、そのネックレスを手を取ったレオンはある事に気がついた。なんといつもレオンが持ちあるいているネックレスと全く同じネックレスをその少女も持っていたのだ。

『こんなに珍しい形のネックレスをもじもじも…』 そんな事を考え
ていると玄関の方から扉が開く音がした。

「たっただいまー！！」

ニコニコとした上機嫌な笑顔で帰ってきたのは、レオンの母コラベ
ール・シチュアーノである。

レオンの母親は、貴族でありながらルーズレイトの宣伝活動の仕事
に携わっている。

元々村の人もあまり好まない様な街であったが、様々な企画やル
ーズレイトの伝統の祭りをだいだい的にアピールすることによって、
街の活性化に一役かった人物である。

何を言っても、元々排他的思考が嫌いだっただ母の一番の功績は、貴
族が権力を有するこの国で貴族と農民が手を取り合い助け合う事が
出来る街を作る事ができたのはレオンの母シチュアーノのおかげで
あろう。

なのでこの街はシチュアーノのようなも排他的な思考が嫌いな優し
い貴族達が集まり、更に憧れの貴族と親しく出来る街として農民か
らも絶大な支持を受けているのだ。

シチュアーノのこの表情を見るに次の企画が具体化を増してきたの
だろう。

レオンのいる部屋まで走ってきたシチュアーノは続けてこう言った。

「コラベルちゃん、今年は『星空の人々』っていう祭りが出来そうなのー。楽しみにしててね。」

嬉しそうな笑みでコラベル・レオンに対してそう言い放った、コラベル・シチュアーノである。

シチュアーノはそう喋った後に、レオンの後ろにいる少女に気がついた。

「あらっレオンまさか、こんな大きなお人形で遊ぶなんていくら年頃でもお母さんがっかりだわ」

部屋に来て早々、早とちりするシチュアーノである。

「違う、コイツは人間だ!!」

指を指して必死に訴えるレオンである。

「まさか、人形を人だと思い込むまで、切羽詰まっていたのね。お母さんがっかりです!!」

正直もうシチュアーノは駄目である。

こんな母を見て諦めたレオンは、ゆっくりと少女の方に向き直りため息をついた。

すると、気のせいかわずかに少女の眉間は動いた。そしてそれは次第に確かな動きに変わりゆっくりと目を開けたのだ。

レオンは、目を擦ると、夢ではないと分かったのだろう。少女に声をかけた。

「おっおい大丈夫か！」

しかしレオンの言葉に少女から返事はない。まだ、頭を整理しているようだ。

少しだけ時間が経ち、少女は突然泣き出しそんな表情になった。

「おいつどうした。」

レオンがそう聞くと、少女はゆっくりと口を開いた。

「アツアア…なんで…私は誰なの…此処は何処なの…」

自問自答をくりかえしてはこわばった表情をする少女。『私は誰なの？』確かに、先ほどまで会話していたレオンでさえまだ少女の名前を知らない、しかし本人が自分の名前を人に問うのは普通ありえない。

「おいつしっかりしろ。お前の名前は…？」

レオンは焦った表情で違う答えを催促するように、問い詰めた。

「思い出せない…分からない。本当に分からないんです…」

少し引け腰で、不安げな表情を浮べる少女、

レオンの言葉は記憶の無い少女の大きな瞳には、相当怖い物に映ったことだろう。

「でっでもっっ!！」

「坊ちゃん!彼女は記憶が無いんです…。明日大きな病院に詳しく見てもらいましょう」

レオンが言葉を喋ろうとした瞬間、少女の体調を考えたりリーが間を割ってはいるように、口を挟んだのだ。

レオンもある程度の予想はついていたものの記憶が無いとハッキリ言われては、言いい返す言葉がなかった。

「あらっ本当に人間だったんだ」

状況を理解出来ないシチュアーノの一言が小さくこたました。

第四章「メモリー」(後書き)

章ごとに行間が違うのは正直どの書き方がみやすいのかわからない
のです！

第五章【真理】

「あの子は、完全に記憶喪失ですね。突然なってしまった用なので、何か命に関わる程の病気を持ってらっしゃる可能性も十分ありえます」

あれから、リオデイル病院に向かった少女はそう診断された。

「そうですか」

医師からの言葉に返事を返したのは、レオンである。

少女は診断が終わり待合室でレオンが戻るのを待っている。

記憶が無くなった状態の少女にこんな話をする少女が更に混乱してしまっただろうと考えた医師の判断によるものだった。

「記憶喪失って…直らないんですか…」

レオンがそう尋ねると医師は、少し暗い影を落とした。

「記憶が元に戻るといふのは、珍しくない話です。しかし、そういうケースは、なじみのあった場所や、記憶に深い思い出などそういうのに触れて初めて記憶が戻ったりするモノなんですよ。しかし彼女の場合この街の生まれの可能性が低くヨソから来た可能性が高いので、この辺りに記憶の取り戻せそうな場所がないかもしれないんです。」

医師はそう告げると座っていたイスから立ち上がり窓の外を見なが

らこう言った。

「ハッキリ言って彼女の症状は最悪でしょう。彼女の精神状態、病気の状況やこの場所が故郷かも知れないということを考えしばらくの間は様子見たほうがいいでしょう。詳しい検査結果はまた後ほどしますんで」

医師がそう言いおえた瞬間直ぐに、音がした。

ガララン！！

「きゃっ！！」

突然、診療室のドアの向こうから誰かがこける音がしたのだ。

まっまさか！

レオンは急いでドアに向かい戸をこじ開けた。

するとそこには、強張った表情で涙を流した、少女が尻もちをついていた。

第五章【真理】（後書き）

読んでくださりありがとうございます。

衝撃の真実を聞いてしまった少女

少女はこれからどうなってしまおうのでしょうか!？

第六章【失われた笑顔】

魂の抜けきった瞳、まばたき一つしないその眼からは大量の雫が無造作に流れだしている。

「きつ聞いてたのか？」

レオンがそう問いかけると少女は体をビクリと揺らした。

「わつ私死んじやうかもしれないんでしょうか……」

俯きかげんの少女、この様子ではどうやら全て話を聞いていたらしい。

「きつと……大丈夫……。」

……死ぬかもしれない。

レオンはその大きな質問に対して、最適な言葉を見つけることができなかった。

そして、しばらくの沈黙が続いた後少女は流れた涙を自分の服の裾で拭い、ゆっくり立ち上がると口を開いた。

「そうですね、大丈夫ですよ。なんか変な事聞いてすみません」

表情では、笑顔を作った少女だったが、記憶喪失になる前までの

ソレ』とは随分変わってしまった様子だ。

「帰ろう……。」

レオンはそう言つと少女を出口にエスコートした。

家に帰宅し玄関を開けると、レオンの母シチュアーノが待っていた。

しかし、二人の様子を見たシチュアーノは何かを悟つたのか、少女に向かつて優しくこう切り出した。

「何か、食べる？」

その質問に少女は少し困つた表情をした。

「………すみません大丈夫です」

そう言つてシチュアーノの問いかけに断りを入れた少女なのだが、どうやらお腹の方は正直者らしい。

ぐううううううう

少女のお腹から空腹を訴える声が聞こえた。

その音を聞いた少女は頬は真っ赤に染めて俯いてしまった。

昨日は、少女もレオンもご飯を食べていないのでお腹が減るのは仕方のないことだろう。

すると、その音を聞いたシチュアーノは笑顔でこう言った。

「あらっやっぱり減ってるんじゃない、何か食べたい物はある？」

そう問いかけると少女は少しだけ顔を上にあげた。

「すみません、私、どんな料理があったかも思い出せないんです」

どうやら、料理というモノ自体は分かるのだが、どんな食べ物があったのか覚えていないようである。

すると、シチュアーノは少し考えた後
「任せて!!」

とだけ言い残し調理場の方に走っていった。

第六章【失われた笑顔】（後書き）

ご指摘感想お待ちしております。

完結まで行きたい！！

第七章【あなたは誰？】

「フッフフ」

調理場では、シチュアーノの鼻歌と共に、グツグツと煮え立ったスープのいい香りが食欲をそそる。

「リリー、ガーリックとハーブ出してっちょ」

「はい」

声を聞くに調理場では、リリーも一緒に料理をしている様子である。

それにしても、見た目はとても若いシチュアーノのだが、いい年したおばさんが『ちょ』などという言葉を使うのはいかな物かと思ふところである。

「お黙り!」

リリーは突然キツと睨みを利かせ何かに向かって怒りだ……おいおい待てよ俺の声聞こえない筈だろ

勘違いという事にしておこう。ブルブル

「なあ、もじもじなんか覚えてる事とかないのか」

料理が作られる様子をイスに座り頬づえをつきながら見ていたレオンが突然少女に質問した。

すると、少女が不思議そうな顔でレオンを見つめている。

「どづしたんだ？」

そう聞き返しても少女の不思議そうな顔は変わらず、レオンに対して質問をぶつけてきた。

「もじもじって誰のことですか？」

少女は出会った時の記憶さえない為、自分かもじもじと思われることさえ理解できない様子である。

「もじもじは……アンタ、それと……」

そう言うとレオンは言葉を少し切った。

「どづしたんですか？」

そう促されレオンはようやく口を開いた。

「どつゆづ気持ちなんだ？今までの記憶が無いって？」

記憶喪失となった少女には少し直球過ぎる質問だが、レオンにとっても分かっていたい大切な気持ちなのである。

「正直私にも分かりません。ただ鏡を見て思うんです。アナタは誰って？」

彼女はそう言った……。

自分の顔が始めてみた人に見える。

周りの人は見ず知らずの他人。

今や自分の名前を知るものさえ存在しない。

そんな世界の中、たった一人何も分からなく生きていかなければならない。

恐らく今放った一言でさえ少女にとっては少ない記憶の大きな思い出となっているのだろう。

すると、少女は、『しまった』という表情をすると、気まずい空気を打ち消そうとするかのように苦笑いを浮かべたがなんとなくどんよりとした雰囲気になった。

第七章【あなたは誰？】（後書き）

久々の投稿です。

今回は、少し暗いですね。

くそ〜文章力欲しいです。

第八章「きっかけ」

そんな空気を読んでか読まずか、シチユアーノが勢いよく良く出てきた。

「やほおー料理出来たわよー」

そう言つと、次々とテーブルの上に料理が並べられていった。

「うわーうまそー」

そう言つて料理を眺めているレオンからシチユアーノは嬉しそうに視線を外しゆつくりと、少女の方に目をやった。すると先ほどの表情とは打って変わつて、興味津々な顔をしている。

その目線の先にはキラキラと輝いた白色のスープが置いてありその中にはジャガイモやハーブなどの様々な食材が豊富に使われている、お腹の空いた今の二人には喉から手がでてきそうな程我慢出来ないものだろう。

「こっこれは、なんという食べ物ですか？凄く美味しそうです」

確かにシチユアーノの作る料理はとても美味しそうである、しかしそれにも関わらず決して豪勢という言葉が似合わないのがいい所だ。

「これはね、シチユアーノっていうのおいしそうでしょ！でもアナタのお口に合うかしら？」

自分の口元に人差し指を置きながら、シチュアーノはそう呟いた。

「それじゃ〜食べましょう！」

ニコニコとした笑顔で皆に食べる事を促したりリーはスプーンを少女に手渡した。

「あっありがと〜ございませす」

皆一斉にスープを食べ始めた。

「うまつ」

レオンはボソリと呟くと思うと直ぐに無言になり夢中で食べ始めた。

シチュアーノは嬉しそうにレオンを見て、その後まだシチュアーノに口を付けてない少女の方を向いてニコと笑顔を向けた。

すると、少女はスプーンで小さくシチュアーノをすくい、ようやく飲み始めた。

「おっおいしいです、とってもおいしいです!!」

そういうと、少女は小さな口でスープを急ぎ目に食べ始めた。

「凄くお腹減ってたのね。良かった気に入って貰えて、アナタには辛そうな顔は似合わないもの、折角のキレイな顔が台無しになっちゃうわ」

そう言うと、シチュアーノはまた少女に優しい笑顔を贈った。

すると、少女はスプーンを持った手をピタリと止めた。

「わっ私なんかきつキレイじゃないです」

そう言った少女の顔は、まるでサラダの上に乗っている、トマトの様だ。

続けざまに今度はレオンに向かって冗談交じりに喋りかけた。

「レオンーこの子可愛いわね〜お嫁さんに貰っちゃいなさいよー」

「なっ!?!」

今度はレオンまで頬を真っ赤に染めてしまった。

シチュアーノが冗談を連発していると、ここでリリーが止めに入った。恐らくこのままでは、埒があかないと思ったのであろう。

「もーシチュアーノさん、お二人をあんまりからかわないで下さいよ、さつきからお二人とも手が止まってるから、せつかく作ったシチューが冷めちゃいますよ」

「うふふ、そうねなんか二人とも反応が面白くて……」

そう言つて、シチューアーノは楽しそうにまたシチューを食べるのを再開し始めた。

その様子を見ていた二人も安心した様子と少しムスツとした様子が混じつた様な表情でまたシチューを食べ始めた。

第八章「きっかけ」(後書き)

おお

ようやく次話投稿です。

まあ見てくださる方もいないと思うんですけど、これからも頑張
つていきたいです。

第九章【お願い】

「おっ美味しかったです!!」

食事を終えた少女は、丁寧な言葉遣いで、感謝の気持ちを述べた。

「うふふ、私達もそんな事を言っただけで嬉しいわ」

そう言うと、シチュアーノは、皿を運び片付けを始めた。

淡々と皿を運ぶリリーとシチュアーノの姿を見ていた少女は、いきなり手を上げシチュアーノに向かって訴えかけた。

「私にも、お手伝いさせてください」

どうやら、先ほどから、招かれているだけでは、居心地が悪かったのかもしれない。

「あらっ良い子ね、レオンも見習ったらどう?」

嫌味ついたらしく、シチュアーノはレオンに向かって冗談混じりの毒を吐いたが恐らく今週は、薪を持って帰らなかったからだろう。

「仕方ないだろ。時間なかったんだから」

恐らく少女を助けたあの日に本来は薪を持って帰る予定だったようである。

すると、なんとなくそれを察した少女は少し肩を落とした。

「いつイヤ、お前のセイじゃないよ。こんな事になったのにも、なんか訳があるみたいだし」

少女は皿を運びながらコクリとだけ頷いた。

少し責任感を感じているのであろう、しかし、記憶が無いのに誰にも迷惑を掛けるな、というのは無理な話である。

少女は皿を置いてきて戻ってきた後、少しの間黙り込みしばらく思索した後、決心した様にもじもじとしながらこう言った。

「すみません、自分勝手だとは思いますが私を雇ってもらえませんか？」

一瞬辺りが凍りついた。

人を雇う？

そんな事はそうそう決める事が出来ないのは明らかである。

恐らくシチュアーノなら何も言わなくても少女を家に喜んで招き入れるだろう。

しかし、雇うのは、別の話である。シチュアーノもある程度名のある家系ではあったが、ルーズブレイトに移り住む事になって初めの時

は、人を雇うのをとても嫌がっていたのだ。

「やっやっぱり駄目だったでしょう？このままじゃ住む場所も無いもので……」

第九章【お願い】（後書き）

見てくださってありがとうございます。

今回は短いですね。

次回はシチュアーノの【過去】編です。

長編は心折れます（汗）

第十章「過去編 幸福」

これは、まだレオンの生まれるずっと前の出来事……。

「シチュアーノちゃん遊びましょ」

優しい太陽の光が照りつける朝方、窓の外から声が聞こえてきた。

ここは、フランスの大都市プロヴァン、バラの有名なこの街は人口がとても多く立地の良さから貿易がとても栄えた街である。

「うう、ほわーあ」

欠伸をしながら大きなベットから、少女はむくりと体勢を持ち上げた。

彼女の名前はコラベル・シチュアーノ、代々続く貴族の家系のお嬢様である。

少しくルリと巻いた茶色の長い髪の毛が特徴的な可愛い女の子だ。

年齢は10才と幼くこれから色々な経験を積んでいく年頃だろう。

シチュアーノは眠たい目を擦りながら、ゆっくりと立ち上がると干鳥足でふらふらと窓の方へと歩みを進めていった。

まだ、朝方の6時で、夜が明けたばかりなので眠たいのは、当然の事である。

窓に近づくと、ノブに手を掛けクルリと回しそれを押しだした。

すると、涼やかな風が窓から、部屋へと入り小鳥のさえさえる声が聞こえてきた。

恐らくシチュアーノにとって、こんなに気持ちの良い朝は久しぶりだろう。

窓から辺りを見渡したシチュアーノは何か気がつくくと、瞳をキラキラと光らせ声を掛けた。

「おい、サーシャちゃん」

シチュアーノは、外に居る女の子に手を振りながら名前を読んだ。更にその女の子に笑顔を贈ると、クローゼットから適当に軽めな服と帽子を選び、走って玄関から飛び出した。

「オハヨー、サーシャちゃん」

「オハヨー、シチュアーノちゃん今日は何して遊ぶ？」

こうして毎日遊んでいる二人、勿論シチュアーノには他にも友達がたくさんいたのだが、サーシャは特別だった。たった一人の親友なのだ。

サーシャの特徴は少し青みのかかった黒の髪に服装は色身のある服を着るのが好きな様子である。

サーシャ自身そこまで、裕福な暮らしではなく普通の民衆の一人で特別貧乏という訳では無かったのだが、近所に家があり遊ぶ時はいつも、二人で遊んでいた。

「じゃ〜今日は、人形遊びしよーよ」

案を出したのはサーシャである、その言葉に対しシチュアーノはキラキラとした表情で頷いて返事を返した。

二人は直ぐに移動を開始し、しばらく歩くと手入れされた芝の生えた公園が見えてきた。どうやら二人はここで、遊ぶ様子である。二人は風呂敷の様なものを下に引くと持ってきたフランス人形で遊び始めた。

「ぴゅーんどーん」

何故かママゴトにしては、フランス人形の体をもち飛び交わすのだが、これも荒手のママゴトなのだろう。

二人とも、楽しそうに人形に様々な動きを出している。

「モリスはナベリアン食べましょーね」

「アハハッ、シチュアーノちゃんそれナベリアンじゃなくて、ナポリタンだよ〜」

サーシャは笑いながら答えた。

とても、子供らしく可愛らしい会話で回りから見ている、思わず笑みをこぼさずにはいられないだろう。

「ゲッ、ナポリタンなんだ!」

それから、暫くナポリタンの話などで盛り上がり、笑いが止まなかった。

恐らくあれから2時間程経ったであろう、突然シチユアーノがサーシャに声を掛けた。

「あっそろそろ私行かないと行けないや」

「どうしたの？」

「ちょっと、用事があるの、そろそろ帰るね」

まだ、昼にもなっていないのだがシチユアーノは帰る支度を始めた。

「そうなんだ、じゃ〜また明日ね」

サーシャは少し寂しそうな表情をした、しかしシチユアーノが途中で帰るのはいつもの事なので、慣れた様子である。

帰る支度の出来たシチユアーノは足早に公園の入り口に移動し、もう一度振り返り、大きな声と手振りでバイバイと言って家路に帰った。

家に帰宅するとシチユアーノは、手さげ袋を起き、おもむろに無骨な形をしたカバンを取り出し部屋を移した。

その部屋には、30過ぎくらいと思われる少しきつめな表情の女の人立っていた。

「先生！よろしく願います」

そう言うと、シチュアーノは無骨なカバンを慣れた手つきで開き、バイオリンを取り出した。

すると、先生と呼ばれる女はいきなりシチュアーノを怒鳴りつけた。

「よろしく願いますじゃないわよ！4分も時間を無駄にしちやったじゃないのー！」

完全なとぼっちりである、シチュアーノはいつもと同じ様に15分前には、準備をして待っているのだが、時間になっても、いつもやってこない女は、たまに早くくるところやっつてシチュアーノを怒鳴りつけるのである。

「ごっごめんさい」

必死な様子で誤るシチュアーノ。

本来は、雇っている側はシチュアーノの方なので、一言言っつてしまえば直ぐに、新しく優しい先生が来るであろう。

しかし、シチュアーノは絶対にそんな事をしなかった。

なぜなら、この厳しい時代に仕事を失う事によって、自分の目の前の人間が路頭を彷徨うのは目に見えていたのだ。

シチュアーノはこの頃から、人並み以上の優しさを持っていた、しかし、その優しさは時として、自分が耐えるだけでというトコロまで、行ってしまうのだ。

しばらく説教をすると、ようやく納得したのか先生はバイオリンを弾くように支持した。

すると、シチュアーノはバイオリンを持ち早速演奏を始めた。すると、とてもキレイな音色が部屋中に響き渡った。

シチュアーノのバイオリンの音は十歳とは思えない程キレイなのだ。その音色はまるで、晩酌でグラスとグラスを重ねる瞬間の様に優しく、時に協会の鐘の音の様に荒々しく抑揚のある音色だった。

はつきり、言ってしまうえば彼女の演奏する曲はまだ10才という年齢でありながら、30歳を過ぎた、先生の腕を遥か上を行っているであろう。

勿論、才能の方もかなり関係してくるが、それ以上に練習量も多かったのである。

練習していた、大量の課題曲が一通り終わり、練習を終わらせた時には、もう午後の8時を回ってしまっていた。

「ふわ～あ、今日は終わり～あたし帰るわ～」

先ほどまで、うたた寝をしていた先生は、突然起き上がると、帰る仕度を始めた。

「先生！お疲れ様でした」

シチュアーノは先生にこれでもかという程の笑顔を振りまいた。

次の日いつも通り窓の外から声が聞こえてきた。

「シチュアーノちゃん」

いつもと同じ元気な声が聞こえてきた。恐らくサーシャがやってきたのだろう。

シチュアーノはいつも通り直ぐに仕度をする、外に飛び出した。

シチュアーノの生活は毎日がこの繰り返しである。

最近、コンサートの日数も迫って練習の量が多くなってきている事もあるだろうが、やはり10才の子供の練習量にしては、以上の時間と言えるだろう。

「ねえ、シチュアーノちゃん何して遊ぶ？」

「じゃ、今日は、鬼ごっこしようよ」

今回案を出したのは、シチュアーノの方である。

ニコニコとした笑顔でそう言い放ったシチュアーノはとても、楽しそうである。

普通ならこの様な自由の限られた生活が嫌になってしまいかねないのだが、サーシャと遊ぶこの瞬間がシチュアーノにとって最高の時間になっているため、この短い時間が、シチュアーノの心の支えとなっているのである。

いつも、通り近くの手入れされた芝の生えた公園に行った二人は鬼ごっこを始めた。

二人の遊ぶ姿には貴族と農民という階級による壁は無く今の時代に

合わない絆で結ばれていた。
二人とも、楽しそうに公園で走り回っている。

「サーシャちゃん？」

「イタッ」

逃げていたシチユアーノが突然歩みを止めた為、サーシャはシチユアーノにぶつかってしまった。

「いきなり止まらないでよくどうしたの？」

すると、少し照れた様子でシチユアーノは振り返りこう言った。

「私、サーシャちゃんと友達で良かった」

突然何だ？という様な顔をしたサーシャは頭をかしげながら、シチユアーノに問いかけた。

「いきなり、どうしたの？」

すると、シチユアーノはこう言い返した。

「私、今あなたのおかげでとっても幸せだもの」

少しはずかしい言葉ではあるが、その言葉を言い終わる頃にはシチユアーノの態度はとても凜としていた。

それを聞いたサーシャも笑顔になりこう言った。

「私もよ」

そう言い終わると、サーシャは少し感覚をあけシチュアーノにタッチすると、また走り出した。

「あつゝずるゝい待てゝ」

サーシャはまたシチュアーノから背中を向け走り出した。

こんな、幸せがいつまでも……。

これが二人の願いだった。

第十章「過去編 幸福」(後書き)

ありがとうございます。

投稿完了です。

今回は過去編です

次回もまだ過去編だと思います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9090w/>

中世ルーズレイト劇場

2011年12月28日23時50分発行